

## 彼岸花（曼珠沙華）

長年、旅歩きをしていると、思いもかけぬ風景に出くわすことがあります。

あの真っ赤なヒガンバナ（彼岸花）。秋の彼岸のころ咲くのでそう呼びますが、別にマンジュシヤゲ（曼珠沙華）ともいいます。マンジュシヤゲとは、法華経などの仏典にある「摩訶曼陀羅華曼珠沙華」から出た名称で、「天上に咲く花」という意味があるようです。が、この世では、毒草として敬遠もされてきました。

そのヒガンバナの花が神前に供えられているたのです。これには、驚きました。

ちなみに、彼岸花は、ヒガンバナ科ヒガンバナ属の多年草です。秋に地中から花茎を伸ばし開花。花が枯れてから葉が出て翌春まで繁り、その後、夏には葉が枯れて休眠状態となります。

それは、広島県竹原市田<sup>た</sup>万<sup>ま</sup>里<sup>り</sup>の八幡神社の

秋まつりでした。聞けば、広島県の農山村では、ほかにも彼岸花が供えられる例が点々と伝わっていた、ということでした。それは、飢饉のときに、その球根（地表直下）にあり、大きさは、チューリップのそれとほぼ同じ）を食料にしたという先祖の労苦をしのんでの伝承なのです。花が問題なのではありません。球根が飢饉のときに食されたのです。その彼岸花は、とくに田圃の畦や畑まわりによく群生しますが、それには、ふたつの理由があります。ひとつは、その有毒性を利用して野ネズミやモグラなどから田圃や畑を守るため。墓場に彼岸花がみられるのも、遺体を動物から守るため、といわれます。もうひとつは、備荒食として保存をはかるためです。彼岸花の球根には毒性があるため、農産物扱いをされませんでした。そのため、年貢の対象外とされたのですが、球根には多

くの澱粉でんぷんが含まれていて、毒あく抜きをすれば十分に食用となりえたのです。広島県にかぎらず、三重県や徳島県、高知県の山間の村でも食されていたことが、記録に残されています。もちろん、彼岸花の球根を食べるには、相応の知識と技術が要ります。まず、茎ごと流水に浸して球根の下部（根元）を切り落とします。次に、上部（茎元）を切り落とし、しばらく水に晒さらしたあと、球根を取り上げて天日に晒します。叩いて荒粉にして晒すと、アク（毒素）がぬけます。それを団子状にまとめて蒸せば、クワイなどと同じようなもっちりとした食味を呈するのであります。

ただし、生療法は怪我のもと。けっして安直に試されませんように。